

ほな、い歴史通信

第114号

2025(令和7).3.1

新生太子町、発足から七十年を迎えて

―保内郷一円合併に向けたある村長のこだわり―

昭和三〇年(一九五五)三月三十一日、一町八か村が合併して新生太子町が発足した。人口規模では県内五番目(四万三八三〇人)、行政区域の広さでは県内一の自治体の誕生である。三月末で七十年目を迎えるのを機に、本誌は来し方行く末を考える一助として、合併時を振り返る小特集を組んだ。ご覧いただければ、と思う。

さて、二転三転した合併の経緯については次頁からの神長さんのエッセーに譲るとして、本欄では当初から保内郷一円合併を唱え、その牽引者となった上小川村長宮田篤三郎に注目してみたい。

明治二四年三月、佐原村初代村長を務めていた神永秀介の三男として生を受けた。神永は、村会議員、郡会議員、県会議員等を歴任し、村行政のみならず保内郷地方や久慈郡といった広域行政の面でも大きな足跡を残した人物である。例えば、菊池武保(太子町)、櫻岡敏(袋田村)と共に「保内郷三傑」の一人に並び称され、また大正八年には「保内地方における産業奨励及教育振興に多年尽瘁した」「保内功労者」として保内郷の全町村長連名で感謝状が贈られている『太子地域の旧町村長事績集』。子供時代から、こうした父の広域的な活躍ぶりを目の当たりにしていたに違いない。

大正二年三月に東北帝国大学農科大学(現北海道大学)を卒業し

て帰郷し、やがて上小川村の宮田家に養子縁組が決まり宮田姓を名乗るようになる。同六年の村会議員当選を皮切りに、父親同様に郡会議員、県会議員として活躍の場を広げていった。県会議員の時代には、「天賦の弁力あり、壇に立つや、雄勁の論議必ず人を魅するものあり」(『イハラキ時事』昭和六年四月号)、と評された。

その宮田が合併問題に直面したのは、昭和二七年四月からの上小川村長七期目の時である。県が示した合併案は、保内郷十町村を三分割する案であった。その方向で議論が進もうとした時、唯一それに異を唱えたのが宮田村長である。三分割案は将来を見通さない近視眼的発想だとして批判し、「わが保内郷は経済的に人のつながりに、風習伝統から見ても一つにまとまるということが最も理想で」とあるとして保内郷一円合併を主張した。こうした父親譲りの広域的、長期的視点からの主張は、雄弁家として鳴らした宮田だけに説得力をもったのかもしれない。町村合併協議会のような公式の場以外でも、宮田村長や村の首脳は精力的に動いた。さらに、宮田個人としても説得に奔走したのではないだろうか。

その効あつて宮田らの主張が受容され、一円合併が実現するかと思われた一歩手前で頓挫の憂き目を見る。だが、その考え方は根強く支持されていた。その後一町五か村合併が先行するが、第二段階として生瀬、上小川、下小川の三村が加わることになる。諸富野村と下小川村の複数の地区が山方町と合併し、完璧な形で保内郷一円とはならなかったが、ほぼそれに近い形で合併が実現した。各首長の思惑が交錯するなか、保内郷一円にこだわった、いわば宮田の執念が実ったともいえるのではないだろうか。

追記 私事ですが、今年度末をもって太子町歴史資料調査研究員を退任いたします。昭和五六年五月、町史編さん専門委員に任命されて以来の、あつという間ですが濃密な四三年間でした。多くの方々との出会いと交流が忘れられません。ありがとうございました。(齋藤典生)

昭和の大合併を振り返る（下）

神長敏

上小川村の宮田篤三郎（佐原村初代村長の神永秀介氏の三男）村長は、県計画にある一町五か村合併の枠を越えて、持論である保内郷一円一町九か村（大子 依上 佐原 黒沢 宮川 生瀬 袋田 上小川 下小川 諸富野）合併論を打ち上げ、昭和二十九年（一九五四）六月九日の上小川村合併調査会の席上で、「（前略）幾つかの町村が合併することに依ってその財政力を結集し少なくとも自主自立の線に迄これを強化し自らの力で住民の共通の福利を図るというのが合併のねらいであります。（中略）そういう観点から申せば僅か二、三の町村が合併しても意味のないことで、少なくとも五ヶ町村或いはそれ以上の合併が必要だと考えます（後略）」と述べた。

一か月後の七月十日に、上小川村は、「保内郷十箇町村合併」を決定し、宮田村長及び石井議長は、その案を持って、保内郷の町村長を訪問し、自分たちの案に賛同されるよう申し入れを行ったが、町村の反応は積極的なもの、消極的なもの様々であった。

しかし、この申し入れは、保内郷地域の合併についての新たな問題提起となったことは確かであった。

八月十日、県計画で提唱された上小川村、下小川村、諸富野村の三か村合併協議会が開催されたが、上小川村から保内郷一円合併が打ち出されたため、当然ながら意見の一致を見ることがなく、三か村合併は事実上白紙、棚上げとなってしまった。

諸富野村の合併調査委員会は、八月二十五日に山方町との合併方針を確認し、この後、村は地区ごとに懇談会を開催して村民の意見を集約することとした。この時、北富田地区の一部に山方町との合併に反対する動きがあることが明らかになった。北富田地区の一部の住民は、山方町との合併見直しの陳情を繰り返したが、

諸富野村と山方町との合併が不可避なものとなった時、諸富野村からの分村、以前からつながりの深い下小川村への編入を決意し、それを下小川村に要請した。十一月十七日に出された諸富野村長及び議長宛の陳情書では「山方町と単村合併せんとする諸富野住民と六十年の永い関係ある袂を分つて下小川村へ分村合併を求め子孫の永住の地と定めることに決した」と記されていた。十二月二日、下小川村議会は、北富田地区の一部七十戸、約三百名の受け入れを議決し、他方、十二月十三日に山方町議会、諸富野村議会が合併を決定した。昭和三十年一月十三日、大字北富田の一部を下小川村へ編入し、残る北富田の一部と大字諸沢、大字西野内を山方町に編入する旨の合併が知事より認可された。

一方、宮田村長の一円合併の申し入れに対し、保内郷の各町村は懇談会を開くなど検討を重ねた結果、九月八日に、各町村長、議長合同合併協議会が大子町役場に招集され、賛否様々な意見が交錯したが、最終的には、各町村の足並みが揃い、一町八か村合併（一円合併）の方針が固まった。

十一月十日、一円合併を前提とした町村合併促進連絡協議会の設立総会が下小川村を除く一町七か村の出席により大子小講堂で開かれ、会長には八代保大子町長、副会長には岡村裕袋田村長、金澤常雄大子町議会議長が就任した。本総会の後、十一月二十日には最初の運営委員会が開催され、各町村は十二月十五日までに合併を議決し、翌昭和三十年二月十一日に合併することを決した。

これで順調に進むかと思われたが、事態は急変する。

合併の形式、つまり大子町への吸収合併か、対等合併かの問題が浮上したのである。合併の形式は、合併後の町村のあり方に種々影響を及ぼすので、この問題は重大な関心事であった。大子町は吸収合併を主張し、他の七村は結束して対等合併を主張して互いに譲らなかった。これで一円合併の動きは頓挫し、このまま昭和二十九年の年の瀬を迎える。

保内郷一円合併が合併形式を巡る対立で頓挫したものの、合併は前に進めなければならないという意識は共通のものであった。

そこで、合併の主導的存在である大子町合併調査会では、昭和三十年一月十三日に開かれた会議で局面打開のため振り出しに戻って、県計画にある一町五か村合併案で交渉を進めることが確認された。しかし、黒沢村では、一月二十六日の町村合併調査会で保内郷一円合併を第一案とし、一町五か村合併案を次案とすることを決し、翌二十七日に開催された町村合併促進連絡協議会では佐原、宮川、袋田の各村代表も黒沢村の意見に同調した。これで事態打開が一層難しくなったと思われたが、翌二十八日大子町は思い切った作戦に出た。大子町長名で各村に次のような文書が发出された。「本日の大子町町村合併調査会において大子町は依上村と合併することに決定し明二十九日町議会にて正式議決する事になりました。つきましては貴村においても是非今回の合併に参加されます様御努力下され度切に願ひ申上げます」。

この大子町の唐突な動きに各村は驚きを隠せなかった。

黒沢村長から村の合併調査員あてに発送された文書からその慌てぶりがうかがえる。「(前略)本村としても進むべき方向に苦しみましたが万策つきて(中略)一町五か村(県案)合併に加はることを決意しました。(中略)何せ時間的に余裕がなくやむなく本二十九日午後六時を期し議会を開催するべく招集通知を發し議決をいたさねばならぬ状態に追い込まれました」。

一町五か村の議会は、二十九日午後九時半にそれぞれ同時に合併の議決を行った。事態は、大子町の企図したとおりとなった。

一方、下小川村は、三か村合併が事実上消滅した後も、自らの去就を明らかにしなかった。山方町は、諸富野村のみならず、下小川村にも合併を申し入れていたのである。村内は、山方町への合併を希望する家和楽、盛金、久隆地区民と反対する西金地区民との間で意見がまとまらなかった。二月九日の村議会で両者の対

立が頂点に達した。数百名の両地区民が村役場を挟んで対峙することになり、大子警察署から警官が派遣される騒ぎになった。本議会において、家和楽地区民から提出された山方町との合併即時決議要求書が議会に受理され、採決に入ろうとするや反対派議員が退場したため、賛成派議員のみで採決してしまった。これに対し合併反対派も反応し、二月十四日、反対派議員のみで、先の議決をくつがえして、山方町に合併しない旨を採決した。同一議会が相反する議決を数日の内に採決するという前代未聞のこととなった。この後、下小川村は分村という事態を招くこととなる。

合併を議決した大子町他五か村は、二月十八日に新町村建設審議会を結成し、合併後の町の建設計画策定作業に着手した。

生瀬村は、県計画案のとおりどころも合併せず、単独で進むほかないと考えていたが、大生瀬坂西地区から合併に加わりたい旨の陳情書が提出され、それが不可能な場合は分村も辞さないとの態度が示された。また、宮川村等から合併への勧誘もあったことから、二月十九日に生瀬村も合併に加わる方針が打ち出された。

二月二十日に上小川村が、二月二十三日には分村という結束で内紛に終止符を打った下小川村が新町村建設審議会に合併申し入れを行い、雪だるま式に一町八か村の合併が整った。

このように、新生大子町が誕生するまでの過程は、決して順風満帆なものではなく、虚々実々の駆け引き、紆余曲折を経て、分村という悲劇も伴いながらようやくまとまったのである。

追記 私事で恐縮ですが、令和二年度から『ほない歴史通信』の事務局の任に当って参りましたが、今年三月で六十五歳となり、再任用職雇用期間満了となりました。元々、歴史には興味がありましたが、この五年間、この事務を通して今まで知らなかった多くの史実を学ぶことができました。皆様から御指導を賜りながら仕事ができましたこと、この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。(大子町西金在住)

新生大子町の船出



常陸大子駅前における上小川商業会のパレード
(故別府甲子夫氏撮影)

大子町は、昭和三十年（一九五五）三月三十一日、大子、依上、佐原、黒沢、宮川、袋田、生瀬、上小川、下小川の保内郷一町八か村が合併し、誕生した。当時は、面積三二五・一三平方キロメートル、人口四万三八三〇人、戸数八〇九九戸を擁し、県下最大の町だった。昭和三十年の国勢調査において、県内市町村の人口を比較すると、大子町は、日立市（二万三〇一一人）、水戸市（二万四三六人）、土浦市（七万二〇二三人）、下館市（五万二八五〇人）に次いで五番目（四万三二二四人）に多かった。県下最大の町だったことはもちろん、県内十四市のうち十市は大子町よりも人口が少なかった。当時としては異例の人口を擁する町だった。

同年四月十六、十七日の二日間にわたり、新生大子町の誕生を祝う合併祝賀行事が全町を挙げて盛大に開催された。『いはらき』新聞（昭和三十年四月十六日付）によると、町長職務執行者、町会議員、町職員、各官公署長、各種団体長、その他関係者ら約七百余名が一堂に

会して合併祝賀式典が挙行され、次いで、自治功労者の表彰や祝宴が行われた。併せて、小学生の旗行列、浅川のささらの演舞、各町内の屋台の巡行、大子三業組合による「大子小唄」「大子音頭」の発表会が行われ、さらに「三業組合のきれいだころは総勢で旧全村をバスで巡廻唄と踊りをご披露」し、全町は祝賀景気に沸き立ったという。

上の写真は、祝賀行事において、上小川商業会が常陸大子駅前を装飾された三輪自動車でパレードしているところを写したものである。写真右手に写る三輪自動車の荷台は、新生大子町の誕生にかけて、紙巻きたばこ「新生」の箱で装飾されている。

同年五月八日、新生大子町初の町長選挙が告示された。立候補者は、八代保（町長職務執行者、旧大子町長）、宮田篤三郎（旧上小川村長）の二名だった。『いはらき』新聞（昭和三十年五月九日付）によると、国谷順一郎（元旧佐原村長）、黒崎甲子郎（元旧大子町助役）が立候補を検討するも断念し、益子善次衛門を推す声があったものの本人が立候補を固辞したという。一騎討ちの激しい選挙戦の末、同月十八日に投票が行われ、八代が一万〇五九一票を獲得して初代町長に選出された。一方、宮田は、新生大子町誕生の立役者だったが、得票数は七七七三票に留まり、八代に及ばなかった。『いはらき』新聞、昭和三十年五月二十日付。その後、七月に岡村裕（旧袋田村長）が収入役に、十二月に塚田金重（旧依上村長）が助役に就任し、新生大子町の舵取りを担う三役が揃った。

明けて昭和三十一年（一九五六）一月三日、大子町連合青年会の主催、大子町等の後援により、保内郷一周駅伝競走が開催された。これは、旧町村単位で組織されていた九つの青年会が旧町村すべてを周る駅伝で競い合うものだった。駅伝の行程は、総延長六十一キロメートルで、十四区間に分かれていた。一区は西金駅前、上小川駅前、二区は上小川駅前、割山、三区は割山、水根、四区は水根、小生瀬、五区は折り返して小生瀬、水根、六区は水根、



保内郷一周駅伝競走決勝点
(故別府甲子夫氏撮影)

割山、七区は割山く常陽銀行前(大子)、八区は常陽銀行前く万年橋(下野宮)、九区は万年橋く町付郵便局前、十区は町付郵便局前く大金沢入口(上野宮)、十一区は大金沢入口く佐原小前、十二区は佐原小前く田野沢口(下金沢)、十三区は田野沢口く上岡小前、十四区は上岡小前く常陸大子駅前だった。

当日の模様を『広報だいいご』第六号(昭和三十一年二月一日付)に掲載された「駅伝競走」随行記」に基づいて紹介しよう。当日は、絶好の晴天に恵まれた。午前十時、時報を合図に色別のタスキをかけた九名の選手が西金駅前をスタートした。二キロ地点で早くも上小川がトップに立ち、上小川駅前では熱狂的声援で迎えられた。二区の鰐ヶ淵付近に至ると、各選手の間隔が開いたが、生瀬は八位から断然トップに躍り出た。三区は心臓破りの月居峠

があり、各青年会ともベテラン選手が日頃の健脚ぶりを遺憾なく発揮した。小生瀬の折り返し地点で上小川が生瀬を抜いて再びトップに立ち、峠を転がるように下りていくのを生瀬と大子が追った。大子に入ると、黒山の人だかりと声援、常陽銀行前では熱狂的拍手が選手を迎えた。八区では、袋田が八位から五位に進出するも、上位の順位は

変わらず、万年橋に至った。宮川では、地元の人々が彼我の差別なく選手を拍手で迎えて応援した。九区では、五位の袋田を抜いた依上、黒沢、下小川が激しい接戦を繰り広げた。町付に入る寸前、女子二人が黒沢の選手に並走して声援を送り、黒沢はラストスパートで依上、下小川を引き離し、女子二人と共に五位で町付郵便局前に至った。十区では、宮川と袋田が競り合い、十一区では、峠越えの難所を地元の利を得た佐原が力走し、大子、生瀬を抜いて二位に躍り出た。田野沢、下金沢、上岡を経て大子に入ると、各地区の声援が一度に集まったような感じで予想以上の人出に一驚する。常陸大子駅前、午後一時四十三分四十七秒、上小川がトップでゴールすると、歓声と拍手が連続して沸き上がった。優勝した上小川には町長杯が授与された。記事は、選手百二十六名の敢闘力走を称賛し、大子町からオリンピック選手が誕生するのも夢ではないと述べて締めくくられている。

保内郷一周駅伝競走は、大成功を収め、翌年以降も継続して開催された。後には、大子一高等も参加し、より白熱した。

大子町は、保内郷という地域的なまとまりを持つ一町八か村の合併により県下最大の町として誕生した。旧町村は、互いに深い関係を持っていたが、明治二十二年(一八八九)の町村制施行以来六十六年間、別々の町村として歩んだ歴史も持っていた。七十年前、新生大子町は、長く続いた旧町村の垣根を超え、町の一体性を育みながら、新たな歴史を歩み始めたのだった。(大金祐介)

保内郷一周駅伝競走 結果

順位	青年会名	記録
1	上小川	3h 43m 47s
2	佐原	3h 47m 03s
3	生瀬	3h 48m 22s
4	大子	3h 49m 22s
5	依上	3h 51m 12s
6	下小川	3h 52m 49s
7	黒沢	3h 55m 16s
8	袋田	4h 00m 15s
9	宮川	4h 00m 20s

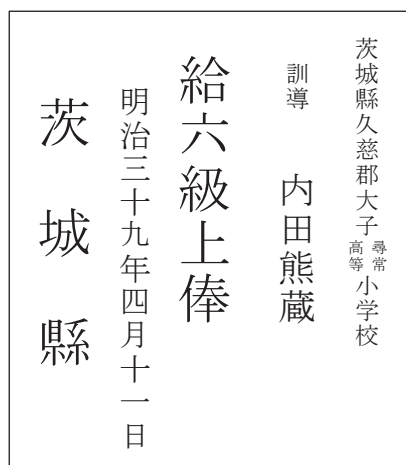
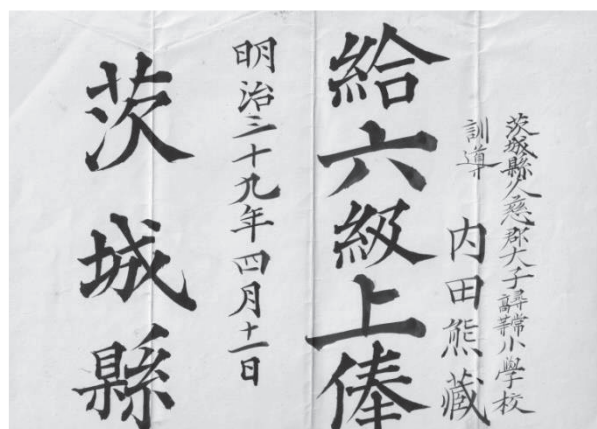
大子における内田熊蔵の足跡（その二）

内田 正人

熊蔵が「久慈郡大子尋常高等小学校」に奉職したのは明治三十九年（一九〇六）であつた。この年に長男（私の祖父）美和が尋常科

第一学年に入学した。この年の俸給
 辞令は次の通りである。

【史料一】給六級上俸



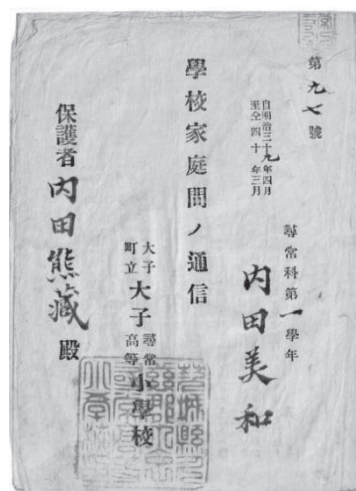
員であり、訓導兼校長への昇任は翌四十年であつたと思われる。

「六級上俸」の給料は、熊蔵が残した資料には、二十四円とあり、外に「任大子町立実業補習学校長として一円」と記されている。この「大子町立実業補習学校」とは、『大子町史』によれば、明治三十九年から各町村の尋常高等小学校に実業補習学校を附設、小学校卒業者を対象に実業補習教育を行っていたものである。

明治三十三年改正の「第三次小学校令」では、「町村立小学校校長及教員ノ任用ハ、郡長ノ申請ニヨリ県知事之ヲ行フ」とあり、郡長を申請者に、県知事を任命権者に設定している。熊蔵は、久慈郡長と親しく交際していたことが、残されていた多くの書簡から

分かる。明治三十四年から四十三年までは丹誠が、四十三年から大正三年までは羽田久遠が久慈郡長であつた。丹誠は旧水戸藩士、羽田久遠は西南戦争で功績を挙げた旧淀藩士であつた。

【史料二】明治三十九年、大子尋常小学校に入学した内田美和の「学校家庭間ノ通信」（通知表）に

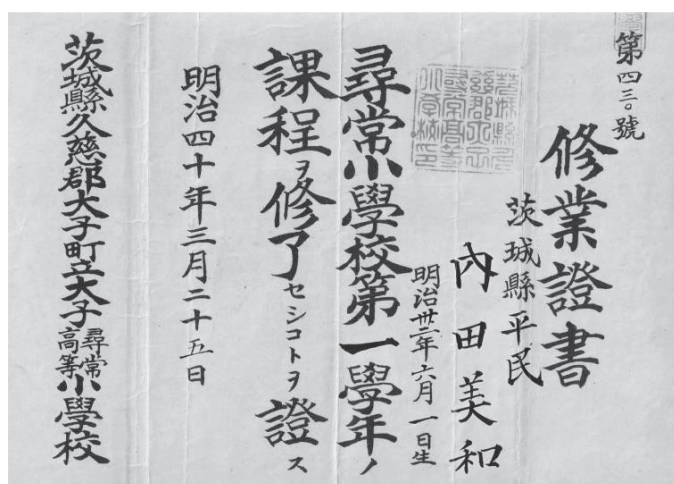


は、①保護者ノ心得、②身体検査表、③成績表、④学校ヨリ家庭、家庭ヨリ学校ヘノ通信事項、⑤児童出欠席、⑥コドモノコ、ロイの六つの項目がある。保護者の心得では、「弁当ノ外ノ食品及ヒ金銭等ハ嚴禁セラレタシ」とあり、服装については、「女兒ハ随意ニテ可ナレトモ男児ハ筒袖ノ和服ニ袴ヲ着クルカ、若クハ洋服トセラレタシ」とある。

第一学年の成績は、修身、国語、算術、操行の四つで、全て「甲」と優秀であつた。

【史料三】「第一学年修業證書」、

学年毎に、立派な修業証書も渡されていた。氏名の前に「茨城縣平民」と書かれているが、明治時代に四民平等となつたが、士族と平民の族籍はしばらく利用されていたのである。（日立市在住）



新発見！！

古文書に残る大子の城

五十嵐雄大

大子町域には多数の中世の城が残っていますが、その多くは城主の名前はおろか、城がどのように使われていたのかさえよくわかっていません。その解明に大きく関わるのは、当時の古文書ですが、古文書に城の名前が出てくることは極めて稀です。大子町でも、依上城・黒沢城（荒蒔城）・月居城くらいしか確認されていませんでした。先ごろ、新しく大子の城の名前が出てくる古文書を発見したので紹介したいと思います。

大繩かたへ、御状披見仕候了、仍今度半者为防戦、又者此御調儀、上様江可為無二之御忠節候間、為此方、殊可然令存事候、猶々大野・矢沢両所并彼城主被討取候事、則上様江申候了、定可被成 御書候、委細使節二申候間、令省略候、恐々謹言

十一月廿一日右京大夫義憲（花押影）

謹上 白川修理大夫殿

これは、太田城主の佐竹義憲が、陸奥国の白川直朝に宛てて出した書状の写しです（「遠藤白川文書」）。年代が書かれていませんが、内容を踏まえると、永享一〇年（一四三八）に出されたものと思われます。

内容を見てみると、①（佐竹氏家臣である）大繩氏に白川氏からの書状を見せました、②このたび、（白川氏が）半分は防戦、残り半分は軍事行動に及んだことは、上様への無二のご忠節にあたるので、私としてはよろしいことと思います、③大野と矢沢とい

う所を攻め、その城主を打ち取ったことを直ちに上様へお話ししましたので、きつと上様からの御書をいただけるでしょう、④詳細については使いの者がお話しいたしますので省略します、と記されています。文中の「上様」ですが、鎌倉か京都の足利氏を指すものと思われますが、この当時、佐竹義憲はそれまで属していた鎌倉公方側から室町幕府への鞍替えを模索していたことより、室町幕府將軍の足利義教を指すものと思われます。

ここで注目されるのが傍線部の「大野・矢沢」という城の名前です。これまで「大野・矢沢」の文字は「大野・奥沢」と読まれており、城の所在地がわかりませんでした。ところが、近年、正しくは「大野・矢沢」と読む文字であることが判明し（森本悠介氏のご教示による）、大子町内大野・外大野と大子町小生瀬谷沢を指す地名であることがわかりました。ここから、「大野」は大子町内大野の内大野館か内大野要害、「矢沢」が谷沢要害（大子町小生瀬）を示すと考えられます。本書状から、室町時代の中頃に、生瀬地区の二つの城（大野城・矢沢城）が機能し、城主もいたことがわかります。

当時の生瀬地域は、佐竹一族の袋田氏の所領であったと見られます。袋田氏は佐竹義憲と敵対する山入氏側に属しており、内大野の城と矢沢城は山入氏方の拠点として攻撃を受けたものと思われる。軍功としてわざわざ名前が出されることから、両者は規模の大きい城であったと思われます。

（茨城城郭研究会）



戦時体制下の袋田温泉

―「いはらき」新聞に見る戦争時代の太子(9)―

袋田温泉は、昭和十一年(一九三六)に水浜電車専務の竹内勇之助によつて開発され、県下唯一の温泉として多くの湯治客を集めました。しかし、開発直後の昭和十二年には日中戦争が始まり、袋田温泉の営業も戦争の影響を受けることを余儀なくされます。

袋田温泉の戦争協力は、傷病兵の療養所という形で始まりました。昭和十三年一月に入る頃、竹内勇之助は軍部に対し、袋田温泉の内湯旅館長生閣を戦傷将士の療養所として提供することを申し出ました。同年一月一日付記事によると、「郷土軍将士の療養温泉は長野県下にあり、遠隔の不便且設備の点にも遺憾があつたところ、今回袋田温泉が県下唯一の療養温泉として、銃後の御奉公はこの秋とばかり自ら多大なる犠牲を忍び療養所として提供を申出た」(筆者読点加筆、以下引用記事も同じ)とあり、茨城県出身兵の近場の療養所として、袋田温泉が供されました。

戦時色が次第に強まっていくと、徐々に娯楽施設としての温泉に厳しい目が向けられていくことになります。しかし、袋田温泉は「歓楽施設を持たないために却て国民保健の第一線に保健と療養の国策型温泉としてクローズ・アップ」(昭和十五年八月三十一日付)されることになったようで、新緑の時期などには旅館の予約が取れなくなってしまうほどの賑わいを見せました。

こうした中で、戦時中らしい湯治客が袋田温泉を訪れたことが紙面上の話題となっています。「国民精神総動員下の修学旅行は、時局柄勤皇の発祥地水戸の史蹟水戸学の精神を慕つて来県する者頻繁となつたが、袋田温泉は環境も良く、四度の瀧と相俟つて、附近には武田耕雲齋外の勤皇志士の遺跡等隠れたる古蹟、勤皇歴史に富み、非常時温泉旅行地として最適地のため」(同十三年六月七

日付)東京方面を始め、各地からの修学旅行生が集まりました。また、宿泊客ではないものの、霞ヶ浦海軍航空隊の隊員三八〇人が、水郡線を利用して袋田温泉を訪問し、滝見物を行うとともに、温泉につかっています(同年十一月十日付)。

米英開戦前後の頃には、国策への協力が強く叫ばれるようになります。袋田温泉も戦争に協力する姿をはつきりと見せていきます。その一つが、「荒地開墾、空地利用」と「従業員の精神修養と体位向上」の両立を図つて始めた袋田温泉東側空地を利用しての新興農場の開墾(同十六年三月二十三日付、四月十六日付)です。袋田温泉の立原昌業支配人は、「温泉ホテルも新体制下では儲けることばかり考へてはをられません、やつぱり臣道実践で行かねばならない」と語り、花き・蔬菜の栽培に力を入れています。また、戦争の長期化とともに、燃料資源の枯渇が深刻化する中、燃料供出への協力姿勢も見せ、「緊急薪供出の重大性を考慮し、この程温泉でも協力したいと生産した薪材一萬八千俵を率先供出して村人の感激を集めてゐる」(同十九年三月六日付)と話題になっています。

戦争協力が絶対視される中、袋田温泉は積極的に国策に協力する姿勢を示すとともに、勤皇ゆかりの茨城県下唯一の温泉という特性を活かし、営業を軌道に乗せていったのです。(藤井達也)

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生(大子町歴史資料調査研究員)

藤井 達也(大子町歴史資料調査研究員)

大金 祐介(大子町歴史資料調査研究員)

神長 敏(大子町教育委員会事務局)

大金 真理子(大子町教育委員会事務局)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

☎ 0295(72) 1148

発行日 二〇二五年(令和七) 三月一日